

# 自治体維新

首長インタビュー



京都府宇治市長

久保田 勇 氏

くぼた・いさむ 1948年京都府井手町生まれ。67年府立田辺高校電子工学科卒、「テープレコーダーを自分で設計したい」と松下電器産業（現パナソニック）入社。電子部品製造の宇治工場に配属され、労組幹部を経て83年から宇治市議4期。96年宇治市長に初当選後、現在4期目。京都市市町村職員共済組合理事長。同組合運営のホテル事業に携わっており、宿泊関連産業にも詳しい。64歳。

## ゆかりの「宇治十帖」、源氏物語で街おこし

京都と奈良、2つの古都の間に位置し、10円玉に刻まれた世界遺産「平等院鳳凰堂」を擁し、「宇治茶」という代表的なブランド茶の産地……。知名度だけなら抜群に恵まれたはずの地域でありながら、なぜか観光イメージの薄かった京都府宇治市。久保田勇市長は観光政策の重要性を前面に押し出し、約19万人と京都府内第2位の人口を抱えるベッドタウンの生き残り策を探っている。

### ふるさと1億円で紫式部文学賞を創設

琵琶湖の南端から流れ出した瀬田川が宇治川に名前を変えるあたり。宇治市は長く「宇治川ライン」や干拓前の巨椋池<sup>おぐら</sup>を中心に、京都や大阪からの日帰り保養地だった。高度成長期以降、ベッドタウンとして発展してきた街づくりの転機は、竹下内閣の「ふるさと創生」事業で展開した紫式部文学賞だ。

昭和の終わりまでは漠然と「お茶と観光の街」だった。2本の煙突がランドマークのユニチカが大正時代から、そして高度成長期に松下電器産業、日産自動車系の日産車体と大製造業が工場を展開。人口が4万人の時代に従業員がユニチカが6000

人、松下と日産がそれぞれ2000人ずついて、市では長く「御三家」と呼ばれた。

丘陵地に多い他の日本茶産地と違い、宇治の茶園は平地に多かった。古来、都に近い戦略拠点だったため戦乱で荒らされることが多く、水田よりも再興しやすい茶の生産が好まれたようだ。そんな平地にあった茶園が次々と宅地開発されていき、今ではピーク時の3分の1ほどに減っている。

節目はふるさと創生事業だった。1億円を原資に何をやるか。市議だった私も「ハコモノをつくってもダメ」と市民から提案を募るアイデアに賛同。源氏物語で唯一、地名のつく最末尾の「宇治十帖」にちなんで、女流文学を顕彰しようとなった。作者の名前を冠した、今に続く紫式部文学賞だ。自治体では金沢市の泉鏡花文学賞（1973年

制定)、松山市の坊っちゃん文学賞(89年制定)が既にあったが「追い抜こう」と。一般向けの市民文学賞と合わせて、91年にスタートした。

賞金は200万円と多くないので「審査員で釣るしかない」と梅原猛さん、瀬戸内寂聴さんを軸に宇治在住だった多田道太郎さんらの協力を得た。これまでの20回で、江國香織さんや俵万智さん、吉本ばななさん、川上弘美さんと、後に大きな賞を取った人に授与できたことで、文学賞の存在も浸透してきた。宇治の代名詞は平等院で、「修学旅行で行きましたよ。京都市ですよ」と勘違いされることが圧倒的に多かったが、文学賞のおかげで宇治市の知名度も徐々に上がった。

記念館「宇治市源氏物語ミュージアム」の建設も新たな観光の目玉になった。入場者数が落ち込み始めたときも、源氏物語千年紀(2008年)の節目にぶつけて周到にリニューアルし、テコ入れをはかった。

ミュージアムの完成は市長3年目の98年。有名な絵巻物など収蔵品でアピールするのは難しいし、そもそも自治体では高い物は買えない。そこで、源氏物語に関する文献や研究資料を懸命に集めようとした。地味な取り組みだし、文部省の予算も得たので教育施設の扱いになっているが、内部では「これは誘客施設。教育委員会的発想ではなく、もうけるだけもうけよう」と意欲的に取り組んだ。

あとは館の顔選びだ。ちょうど源氏物語の現代語訳を完成させていた瀬戸内さんを名誉館長にしようとして「先生の部屋だと思ってください」「職員にもどんどん指示を」など、必死に口説いた。

「ただし名誉館長講座を年に1回、必ず」と条件を付けたのは、瀬戸内さんの普段の講演料を考えれば、支払う年俸の元は十分取れると計算した私の厚かましさを。全国各地で「今日の私の話、宇治に行けばよく分かるから」と宣伝していただき、大変ありがたかった。

平等院の入場者数が年間100万人なので、宇治川を挟んで反対側のミュージアムには「その1割も来ればいいだろう」と目算していた。開館効果

が落ちて入場者数が10万人を切ったとき、ちょうど源氏物語千年紀とぶつかっていたので、リニューアルを実施した。篠田正浩監督に手伝ってもらい、上映映像の改革などを手がけた。おかげで開館以来15年で150万人を突破している。宇治市全体への観光客数も、市長就任時の年間380万人から今では500万人以上へと増加。08年は556万人と過去最高だった。



入場客が150万人を突破した宇治市源氏物語ミュージアム。緑が映える山沿いにある

## ■ 税収構造を意識、土地利用計画の見直しに意欲

産業振興の政策だけでは不十分と考える。企業城下町の危うさを意識するが、新たな企業誘致よりも中堅企業の育成、さらには土地利用計画の見直しと、税収構造の改革にも目を向ける。

繊維産業の低迷、自動車や家電の普及と「御三家」の伸びが落ち着いた後、京都市に本社を置く任天堂の工場の成長があった。ピークで見れば御三家の6倍ほどの納税額があり、今でも法人市民税収の6割は任天堂頼みと足を向けて寝られない。実は任天堂の本社建て替え話を聞きつけ、宇治市に誘致しようと考えたこともあったほどだ。

市域は約67km<sup>2</sup>。人口規模が似た自治体は例えば東京都三鷹市、千葉県浦安市、近畿なら兵庫県川西市あたりだが、宇治市はそれらより税収が少ない。理由のひとつは、面積のわりに固定資産税収が少ないことだ。地価のせいではなく、山と農業振興地域が多く、市街化区域が少ないからだ。農業政策、開発と保全のバランスはもちろんある

が、安定的税収を考えれば、市街化区域を増やす方向に土地利用計画も見直していきたい。

企業誘致は今さらの感がある。そもそも用地がない。99年に日産が撤退を決定、地元信金の破たんも重なって厳しい



状況になった。実はその時期「任天堂に何かあったら」という想定で新たな産業基盤整備構想を策定中だった。そこで日産の跡地はすぐ工業団地への転換を決められた。性格は新しい

企業の誕生を促すインキュベーション施設というより、<sup>ふか</sup>孵化した若鶏を育てる機能に特化しよう意識した。開発系・技術系の会社は販売力が弱いので、営業を中心とした経営指導に力を入れ、各種展示会への出品奨励金も用意している。

### ■ 新セールスポイントで観光を戦略的に育てる

これからは産業育成以上に観光が力になる、との考えは明快だ。豊臣秀吉の遺跡や、国による景観認定など、新たな材料もそろった。

第二京阪、京滋バイパス、市道の整備と、道路事情は就任時点に比べて大きく改善された。JRも京都から宇治までは実質複線化され、京都市営地下鉄が市北端の六地蔵まで延伸。大阪と京都を結ぶ京阪特急が宇治線との分岐駅である中書島<sup>ちゅうしよじま</sup>に停車するなど鉄道の便も格段に良くなった。あとは源氏物語に続く観光戦略がカギを握る。

09年にお茶をなりわいとした街並み形成と優れた景観を評価され、「宇治の文化的景観」が国の重要文化的景観に認定された。これまでの水郷や棚田と違い、都市景観としては全国初の認定だ。源氏物語に続く新しい観光材料として街の景観を活用したい。市内にある茶問屋街の、博物館的な建物をきちんと保全し、宇治茶づくりの長い伝統

と合わせてPRしていきたい。

もうひとつの材料が、秀吉が伏見城を築く際に宇治川の流れを付け替えた「太閤堤」の遺跡だ。京阪の宇治駅に近い川の右岸で、07年に発掘された。遺跡というのは発掘直後こそ趣味人を集めるが、長続きしない。展示保存をきちんとやり、さらに一般の人を引き付ける工夫が同時に必要となる。「秀吉と茶の湯」をテーマに、あまり予算はないが、土木技術の史跡と観光交流の新たなゾーンとして整備したい。宇治茶独特の覆いのかかった茶園で、本格的な手詰みなどの工程も見てもらえる施設、というアイデアもある。

宿泊施設が足りず、日帰り客の滞留時間も長くない。施設を単に増やすのではなく、具体的計画の立案を急ぐ。

施設の整備計画は、策定中の「宇治市観光振興計画」の中で具体的に考えていきたい。観光面での構造的な課題は宿泊施設。数が少なく構造的に泊まり観光は弱い。ここで宿泊施設の強化に動くのか、日帰り観光に特化するのか。仮に泊まり客を取らないなら、日帰り客に今の倍はお金を使ってもらうために何が考えられるか。太閤堤の整備や景観の活用も含め、戦略的に考える必要がある。海外からのインバウンドの増加対策にも手をつけたい。既に観光客が多い台湾はひとつの核になると思うが、他にどこをターゲットにするのか。漫然とはやらないようにしたい。

#### インタビューから▶▶

市議時代も含めれば、30年以上も街づくりにかかわってきた。松下労組出身で、大阪も含めて顔が広い。「宇治川の水運をいかして大阪府枚方市や京都市伏見区との間を、昔ながらの船で行き来できれば」と、アイデアは実に豊富。城陽市などとの合併構想は頓挫したが、市域を越えて手がけたい土地利用の腹案もあったようだ。年間5000万人が訪れる巨大観光都市の京都市はすぐ隣。「他人のふんどし」をうまく利用する方法を編み出してもいいだろう。

(京都支局長 瀬崎 孝)